



Brent Stirton/Getty Images/ICRC モザンビーク北部 テデ
地雷除去専門組織ヘイロ・トラストの一員であるビクター・ペレス
(28歳)。カオラバッサ水力ダム近くのシンズンガ丘で地雷を除去し
ている。農民だった彼の祖父は、この地域で地雷の犠牲になった。ペ
レスと彼のチームはこの日15個の地雷を除去。ヘイロ・トラストは
モザンビーク北部全域の地雷を除去した



Brent Stirton/Getty Images/ICRC モザンビーク中部 ゴンドラ地区
タンザニアに本拠を置く社会企業のAPOPOは、対人地雷を感知する製
品開発を専門とする。するどい嗅覚をもつアフリカン袋ネズミが地雷
をかき分けられるよう訓練している。発見された地雷は、その場で爆破
処理される。ネズミを使うことで地雷除去が劇的な速さで進んでいる



Brent Stirton/
Getty Images/ICRC
モザンビーク首都
マプト
1982年から1994年にか
けてモザンビーク解放
戦線の兵士だったアル
マンド・マニュエル・
アプロ・クアンバ(50歳)
は、内戦のあいだ対人
地雷を埋めた。多くの
市民が地雷の犠牲に
なっているため、自分
の行いを後悔している。
次世代のためにも全て
の地雷を取り除かれる
べきだと信じている



Brent Stirton/Getty Images/ICRC モザンビーク中部 バリオ・シウイホ
ボナファシオ・ムアジア(57歳)は、内戦が続いていた1987年に対人
地雷によって左脚を失った。しかし、驚異的なバランス感覚を身に
着け、今も農業に専念している。鋏を妻が持ち、毎日片道45分かけて
自分の農場まで脚を引きずって歩く



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア首都 マナグア
ジョージ・ビクター・ペラルタ(47歳)がホンジュラスの国境付近で
任務に就いていたとき、対人地雷が爆発。右脚の膝から下を失った。
その後、彼はマナグアにあるアルド・チャバリャ・リハビリテーショ
ン病院の警備員として雇われ、働き続けている。ここは、ICRCの障がい
者のための社会基金によって運営されている



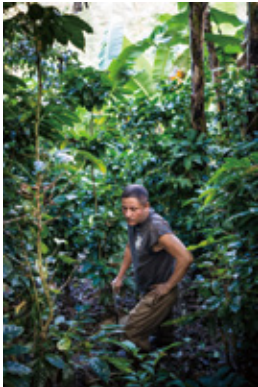
Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア北西部 モンテ
1991年、牛の世話をしているときに対人地雷を踏みつけ、右脚を
失ったエミリオ・ホセ・ゴメス・フロリアノ(42歳)。現在は、自営の製
陶業を手伝っている



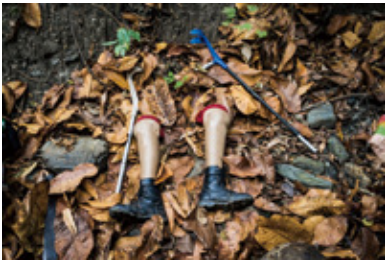
Sebastian Liste/
Getty Images/ICRC
ニカラグア首都 マナグア
ベニート・リバス・ビジャ
ロボス(49歳)は、1989年、
農作業中に対人地雷を踏み
つけ、左脚を失った。現在、
妻と5人の子供と一緒に住
み、農業を続けている。5
年間同じ義足をつけている
ので、新しいものに変える
ために、マナグアのアルド・
チャバリャ・リハビリテー
ション病院にやって来た



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア首都 マナグア
カルロス・ホセ・ピカド(52歳)は、1981年から1990年まで続いたニ
カラグア内戦に参加し、対人地雷を踏みつけ右脚を失った。現在は
マナグア郊外に妻や娘と暮らし、病院の警備員をしながら生計を立
てている



Sebastian Liste/
Getty Images/ICRC
ニカラグア北西部 ハラバ
ジェロニモ・デュアルテ・
アマドール(61歳)は、ホ
ンジュラスの国境付近エル
・コロリトで軍の任務中
に対人地雷で右脚を失っ
た。事故の後、靴の販売を
学んだが、仕事が見つから
ず、コーヒー農園に着手。
しかし、土地を耕す前に地
雷を除去する必要があった



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア北西部 モンテ
ファン・ラモン・ロベス(55歳)は個人で地雷除去を請け負い、コー
ヒー農園で働いていたが、対人地雷で片脚が吹き飛ばされた。その
翌年、別の場所で地雷除去の最中に、もう片方の脚を失うことに。現
在、金炭鉱作業員として働いている。落ち葉の上に置かれた義足と
杖は彼のものだ



Sebastian Liste/
Getty Images/ICRC
ニカラグア北西部 ハラバ
ニカラグアでの内戦終結後
の1990年、ラモン・アウ
グスト・ペラルタ・アギレ(46
歳)は両脚の大腿部を雷に
よって失った。靴の販売を
学び、現在は小さな靴の修
理屋を開いている。家から
職場まで10キロもの道のり
を歩く



Sebastian Liste/Getty Images/ICRC ニカラグア北西部 ハラバ
マイコル・エルモジェネス・モリナ(53歳)はコーヒー農園での作業
中に地雷で左脚を失った。今でもコーヒー農家として娘2人と息子1
人と一緒に暮らしている



Brent Stirton/Getty Images/ICRC

国際人道法写真展

戦場を希望の大地へ

地雷や不発弾など、紛争による被害を受けながらも、
社会復帰に向けて力強く生きる人々の記録。

赤十字は、「戦場で傷ついた人々を敵・味方の区別なく救いたい」という一人の人物の願いから生まれました。1859年、スイス人のアンリー・デュナンは、イタリア統一戦争で負傷した兵士たちが治療を施されないまま野放しにされている状況に衝撃を受け、2つの提案をしました。

「紛争時に負傷者を救うため、平時から各国に救護団体を組織すること」
「救護団体が紛争時に活動するための国際的な取り決めを定めること」

1つ目の提案によって、各国に赤十字社(イスラム圏では赤新月社)が誕生しました。
2つ目の提案によって、ジュネーブ条約が生まれ、国際人道法へと発展しました。
国際人道法とは、紛争による不必要な犠牲を防ぎ、戦闘に参加しない一般市民を保護することを目的に定められた国際的な「戦時のルール」です。

そのため、世界各地で紛争が終わった後も、対人地雷やクラスター弾などの爆発性戦争残存物(以下、不発弾と呼ぶ)によって一般市民が傷つけられている現状を赤十字は見過ごすことが出来ません。

対人地雷やクラスター弾などの不発弾により被害を受けた人びとは、命の危機にさらされるだけでなく、その後の生活や社会復帰への大きな障害を抱えてしまいます。
こうした紛争の負の遺産やそれによって人生を変えられた人々を記録するため、赤十字国際委員会(ICRC)は世界的に活躍する5名の写真家を5カ国に派遣しました。被害を受けながらも、社会復帰に向けて力強く生きる人々の姿をご覧ください。

対人地雷とは
人間を負傷させる目的でつくられた兵器で、触れたり踏んだりして圧力をかけることで爆発します。紛争時、草の陰に置かれたり地中に埋められた対人地雷は、紛争が終わった後も残されたままになっています。
兵士と民間人を区別せず一般市民に危害を加えるため、「悪魔の兵器」とよばれます。

クラスター弾とは
一つの爆弾の中に数十、数百もの大量の子爆弾を詰めて、上空で爆発させることで子爆弾が広範囲にばらまかれます。
戦車や建物などの固いものに当たると爆発しますが、沼地や畑などのやわらかい地面に落ちると爆発せずに残ってしまふことがあります。
残された子爆弾は、紛争が終わった後も一般市民を脅かし続けます。

写真家
Brent Stirton / プレント・スタートン
Marco Di Lauro / マルコ・ディ・ラウロ
Paula Bronstein / ポーラ・ブロンステイン
Sebastian Liste / セバスチャン・リスデ
Veronique de Viguerie / ヴェロニク・ドゥ・ヴィゲリー

主催：  日本赤十字社
Japanese Red Cross Society



Canon

後援：神奈川県日赤紺綬有功会



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ北部 ドボイ
2011年、妻と果物の収穫中に対人地雷を踏んだサリー・ハサナジク(56歳)。妻は命を落とし、彼は脚と背中にも傷を負った。サリーの兄弟のうち、エセフは2006年に地雷の事故で亡くなり、ミレットは1997年に2度の地雷の事故から生き残ったものの、両手脚を失った



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 スノブニカ
(左から順に)ミリツァ(12歳)、デニス(12歳)、アレン(14歳)、ジャスミン(12歳)。2013年11月、デニスのいとこであるミルザ(10歳)と遊んでいた4人は、川でかばん一杯に詰められた兵器を見つけた。ライフル手榴弾の安全装置を解除し壁に投げつけたミルザは、命を落とし、残った少年も負傷。爆発性戦争残存物は、ボスニア・ヘルツェゴビナのように紛争が終結した国でも今もなお、人々の脅威となっており残っている



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 スノブニカ
サビーハ・ハジャリック(45歳)と娘のメリマ(10歳)が、メリマの兄エルダーの墓の側で涙を流している。兄妹が川岸で一緒に遊んでいたところ、エルダーが手榴弾を発見。掴んだ瞬間に爆発し、エルダーは命を落とし、メリマは負傷した。スノブニカは昔の兵營に近く、このような事故が後を絶たない



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 アルビル
マセリエ・サハー(13歳、左)と姉のサエダ(16歳)は対人地雷で左脚を失った。後ろに座る母親のサポートを受け、姉妹はアルビルにあるICRCの身体リハビリテーション・センターで、新しい義足を装着して歩行訓練を受けている



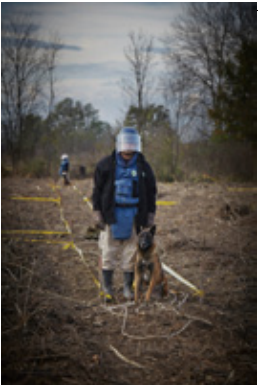
Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 ベルデ
地雷諮問グループから、地雷の危険性を学ぶ学生。地雷や爆発性戦争残存物による負傷者は5万人に上る



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 サラワン地区
オーンラー(61歳)は、1981年に農作業中に拾った不発弾により視力と左手を失った



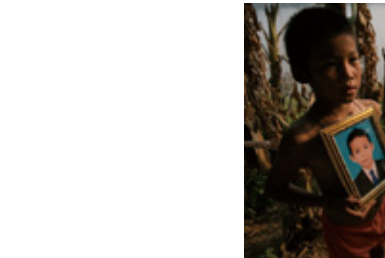
Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 スノブニカ
写真に写る2つの兵器は、125mmの高爆発性榴弾と122mmの砲弾で、爆発性戦争残存物としては一般的だ。砲弾の銅帯は金属くず収集者の手で取り去られている



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ北部
ドマルジェバク・シャマツ
ノルウェー・ピープルズ・エイドという人道支援団体に所属する地雷除去兵が、グレブナイス市で犬を使って地雷を除去している。犬が地雷の在り処を嗅ぎ分けるので、除去率は著しく増加した



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ北部 ドマルジェバク・シャマツ
薪用の木を切るケイト(右)とロウロ・ゼビク。グレブナイス村のこの辺りは、地雷や爆発性戦争残存物が未だに埋まっている可能性が高い



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 バクサン地区
自転車で自宅に持ち帰ろうとしていた不発弾が爆発し、3人の少年が命を落とした。そのうちの一人であるソマック・トー(12歳)の写真を持つメック(9歳)。1963年から1972年のベトナム戦争中、2億7000万個以上のクラスター弾がラオスに投下された



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 トームラン地区
妻のアテリーと写るボンラ(54歳)。1989年、クラスター弾によって脚を失った。義足は手作りで使い古されており、一度も修理したことがない



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 ドゥブレブ
(左から順に)ルジカ・ドゥジュモビク(25歳)、娘のヴァネッサ、(7歳)母のアナ(81歳)。かつては難民だったが、ノルウェー・ピープルズ・エイドとボスニア・ヘルツェゴビナ地雷対策センターが農地の地雷除去を行ったため、村に戻った



Veronique de Viguerie/Getty Images/ICRC
ボスニア・ヘルツェゴビナ中部 スノブニカ
羊飼いは、羊の群れを連れて地雷や爆発性戦争残存物が埋め尽くされている森を通り抜ける。このリスクを冒さなければ、生計を立てることができない



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク東部 ディーノック
ウィッサム・アリ(33歳)は羊の世話をしている最中に、対人地雷に触れてしまった。爆発で右手と右脚を失い、視覚も奪われた



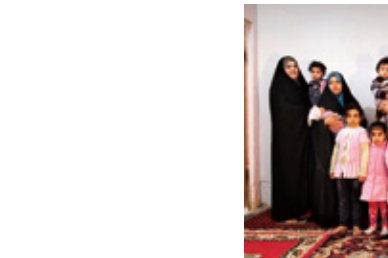
Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス東部 ノーン地区
2012年1月、複数の家族が火を囲んでいたとき、埋められていたBLU-26クラスター弾が爆発。4人が命を落とし、アイヨック(10歳)は右脚を失った



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 シェボン地区
不発弾の撤去作業中に見つかったBLU-24クラスター弾。1973年以降、ラオスでクラスター弾により手脚を失ったり重傷を負った人は約2万人に上る



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 サラバン地区
地雷の除去作業を始める前に、作業方法について説明するノルウェー・ピープルズ・エイドのリーダー。クラスター弾に関する条約は2008年に採択され、ラオスを含む世界半数以上の国が批准している



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク中南部 ナジャフ
軍のエンジニアだったラビーム・ムスリム(45歳)は、北部のアルビルでえん体壕(装備や物資、人を敵の攻撃から守る施設)を掘削中に対人地雷を踏み、左脚の膝から下を失った。親戚とともに写真に収まる



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 マウイリアン
6万8000平方キロメートルあるジマリシェクヒ地雷原。イラク・クルド地雷除去センターの除去兵が、1984年に埋められた地雷を除去している



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 トームラン地区
2013年12月、クラスター弾で遊んでいた二人の男の子が命を奪われた。そのうちの一人はダイ(12歳)の兄弟で、彼女は機織りをして家族の生計を助けている



Paula Bronstein/Getty Images/ICRC
ラオス中部 トームラン地区
家事をするダイの祖母。当時12歳だったダイの兄ともう一人の男の子が犠牲になった小型爆弾は、爆弾と分からないよう上手くカモフラージュされていた。村人は、近くにまだ不発弾が隠れているのではないかと恐れている



Brent Stirtion/Getty Images/ICRC
モザンビーク首都 マプト
内戦に参加した軍人25人が家族と不法に身を寄せるビルに置かれた車いす。彼らは対人地雷で障がいを負い、政府から僅かな給付金を受け取っているが、家族を養うには不十分だ



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 アルビル
1996年にアルビルに設立されたICRCの身体リハビリテーション・センターにある女性用トレーニングルームに並んだ義足。1993年から障がいを持った人々のリハビリテーションを支援している



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク中南部 ナジャフ
サジャード・ファレーがまだ4歳だった2006年1月、3人の兄弟と不発のクラスター弾を見つけ、遊んでいたところ、爆発。2人の兄が命を落とし、弟の腹部は切り裂かれ、サジャードは両脚を失うことに。ICRCの身体リハビリテーション・センターで、自分の診察を待っているところ



Marco Di Lauro/Getty Images/ICRC
イラク北部 アルビル
1991年にイランとの国境付近で右脚を失ったシルワン・アリ・アーメッド(46歳)。戦闘から逃れる途中で対人地雷を踏んでしまった。アルビルにあるICRCの身体リハビリテーション・センターで、義足の型をつくるためにサイズを測っている



Brent Stirtion/Getty Images/ICRC
モザンビーク首都 マプト
ホセ・サボネッテ(54歳)は戦争中に破片式地雷で両脚を失った。5人の子どもを抱え、政府から月100ドルの年金を受け取る



Brent Stirtion/Getty Images/ICRC
モザンビーク北部 テテ
2008年に股関節から下を失ったイヴニア・バイノッセ・チジム(66歳)。泥道を歩いて水を汲みに行く途中、水たまりをよけようとしたところ、地雷を踏んでしまった。誰からも支援を受けていない



Brent Stirtion/Getty Images/ICRC
モザンビーク中部
パリオ・シウイホ
リキナ・ジモ・カリシェ(65歳)は、1987年に対人地雷で右脚を失った。その3年前には、同じく対人地雷で夫が命を落としていた。非常に貧しく、11人のうち9人の子どもが病気や感染症で亡くなった